

ユリディケ

時をこえた旅人たちの物語

遠藤文子

宇野亜喜良 絵



著者紹介

1960年岐阜県に生まれる。

慶応義塾大学文学部卒業後、広告代理店勤務を

経て、現在はフリー。

本書が初めての作品である。

地平線ブックス

ユリデイク 時をこえた旅人たちの物語

一九八九年三月 初版

一九八九年三月 第二刷

著者／遠藤文子
えんどうまこ

画家／宇野亜喜良

制作／小宮山量平

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

162 東京都新宿区若松町一五十六

電話 営業(03)2031-5791

出版(03)2031-5794

編集(03)2031-5777

振替 東京九一九五七三六

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

印刷・堀内印刷

¥1200.

ISBN4-652-01627-1

©Fumiko Endo, Akira Uno 1989 Printed in Japan

ユリディケ

時をこえた旅人たちの物語

遠藤文子

宇野亜喜良 絵



理論社 定価1200円

2-01627-1 C8393 ¥1200E

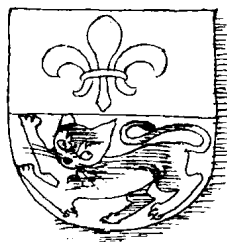
地平線ボックス

エリディケ

時をこえた旅人たちの物語

遠藤文子

宇野亜喜良 絵



理論社

ユリディケ

時をこえた
旅人たちの物語

目次

第1部 虹色の蝶

11

第2部 ダイロスの剣

109

第3部 光と影を制するもの

231

やがて闇が天を覆い

氷が地を閉ざすとも

暗黒の長き冬は

序まりのまへの終焉

死の吹雪の彼方から

生の息吹はめぐりくる

早春のヴェールをまとい

女神リーヴが地に降りたつ

あらたなる祝福に

大地は永い眠りから醒め

大いなる栄光に

歓びの讃歌を謳う

雪溶けの水は調べ

若草は野に萌えたち

時満ちて戻りしもの

天使ユリディケが矢を放つ

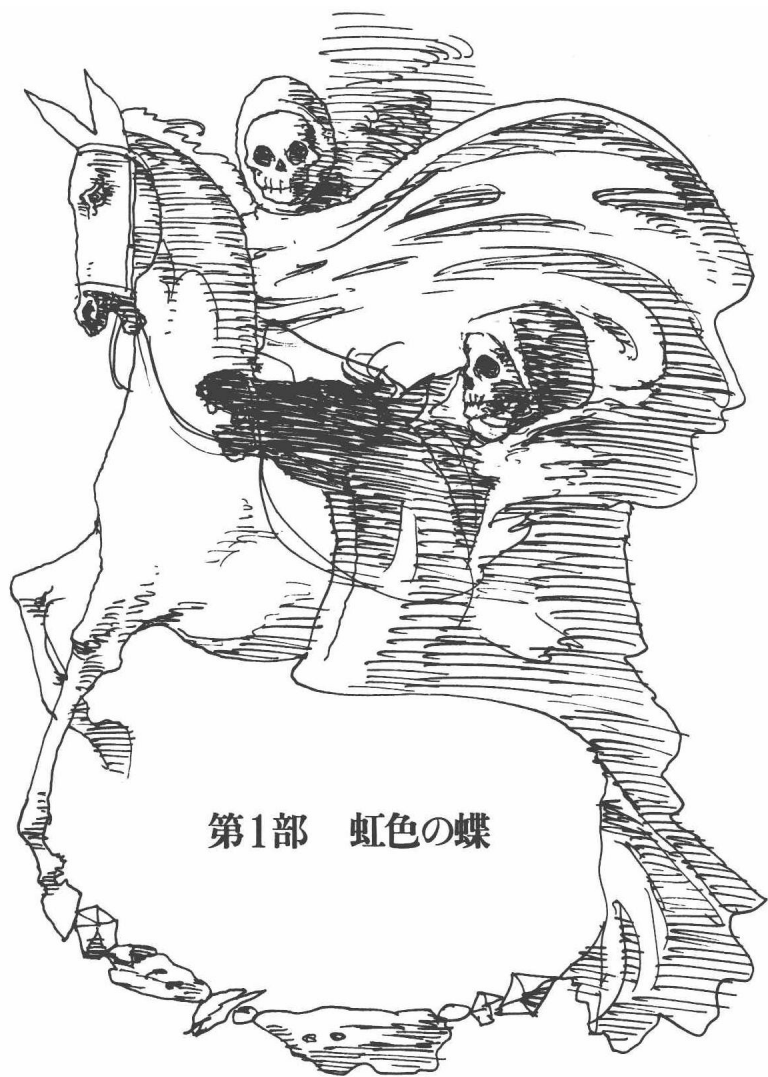
青く輝く生命の矢は

失われし光を降りそそぐ

偽りの永遠は無に還り

真実の永遠が甦る

装幀 平野甲賀



第1部 虹色の蝶

1

ローレアの花が丘の上を一面に淡い水色の絨毯にしていた。午後の太陽が古い遺跡にふりそそぎ、それが落とした影のところだけ、深みのある紫に染まっていた。ユナは、崩れかかった宮殿のなかで、あおむけにねながら、空をみあげていた。青い空はくっきりと澄みわたり、雲ひとつなかった。風がときおり髪をなではかけてゆく。ああ、あたし、世界とひとつになっている。身体がふるえるような幸福感が彼女を包んだ。けれども、いつの日か、もっと幸せになる日がくるんだ――。

ユナは、同じ年頃の娘がほしがるものをほとんどもっていた。美貌、健康、友だち、家族――両親はいなかったが、大好きなイルナおばさんとロデスおじさんがいた。ほめそやされるのに慣れてしまいい、いくらかわがままではあったが、彼女のほほえみをみると、だれもがそれを許した。夢はいつも手の届くところに、いや、彼女の手のなかにあった。未来は希望のなかに輝いていた。もっともっと幸せになる日がくるわ。あたしはすべてがほしいんだもの。この世のすべてが！

「現代よりも進んだ文明がなぜ滅びたのか、まだはつきりとはわかっていません。二千年前、あの伝

説の戦争があつたあと、地上の温度が急激に下がり、世界は氷に閉ざされたといわれています。そして、それが古代文明の最後だったと。そのときフィーンの国エルディラーヌに逃れたわずかな人々が、再び世界があたたかくなつたときに戻つてきて、新しい国々を築いたことです。わたしたちのウォルダナもね。

さあ、今日の授業はここまでにしましょう。なにか質問は？」レアナは教科書を閉じると、生徒たちの顔をみた。

ひとりの年少の男の子がおずおずと手をあげた。

「なあに、ハモン？」レアナはきいた。

「あのう、ぼくのとうさんがいつてたけど、フィーンは永遠の命をもってるってほんとなの？ だれもが二十歳になつたらそれ以上年をとらないで、いつまでも若いままだって」

「ばかいつてらあ」別の少年が口をはさんだ。「年をとらないわけじゃないか。そんなの作り話だよ」

「ロディ。想像できないようなことでも、頭から信じないのはよくないわ」レアナはやさしくさとした。「はつきりとはいえないけれど、ルシナンのひとたちはそう信じているわ。フィーンたちは何千年も生き続けて歴史をみてきたというの。伝説の戦争もね。ただ、今ではフィーンと交流のあるひとはほとんどいないということよ。ルシナンとエルディラーヌの国境に住む、ごく限られたひとたちだけ。そのひとたちも、ほかのひとにはフィーンの話をしたがらないの。」

エルディラーヌへいこうとした学者たちもいたけれど、決して国境の白銀の河を渡ることができなかったのです。岸はみえているのに、いつまでもつかないの。フィーンたちは人間の世界にくる

ことができて、わたしたちはむこうの世界へはいけないのですって……。ねえ、ハモン。わたしも、フイーンにまつわる話は本当だと信じているわ」彼女はそういつてにこっと笑った。

「じゃあ、先生は、二千年前に地上が凍っちゃったのは、ダイロスが世界を死の吹雪に包んだんだっていう話も信じてるんですか？」ひとりの少女がきいた。

レアナはすこし間をおいてこたえた。

「ときにはそうだったのかもしれないと思うわ。それか、もっと別のもの。たとえば地上の争いに対する神の怒りとかなにか……」

「ばくも、そういうことはあり得ると思います」教室のうしろにすわっていた少年がいった。男の子のなかでは最年長で、利発そうな黒い瞳が印象的な少年だった。「気象の変化と長い戦争の終わりが偶然重なっただけかもしれないけど、過去に起こったことで今の常識では証明できないことは、ほかにもたくさんあるでしょう？」

「そうね」レアナはうなずいた。「それに、こんなに長いあいだ語り継がれてきた物語というのは、すべてうそだといってしまえないような気がするわ。わたしの母は子供のころ、ずいぶんいろんな話をきかせてくれたものよ。そうだわ、あしたは古代遺跡の見学に、クレナの丘にピクニックにいきましようか」

生徒たちからわつと歓声があがった。

「クレナの丘にいったことのあるひとは？——あら、あまりいないのね。あしたは楽しみにしてらっしゃいな。宮殿のいろんなお部屋を案内するわ。壁はほとんど崩れちゃって部屋の仕切りもないけれど、王女さまの部屋や、大きな広間や、きれいな絵を彫った柱や、それに、王様の椅子だったもの